



時代を拓き 世界に貢献する人を目指して

# Global View

2019年5月11日 Newsletter 第57号 仙台白百合学園中学・高等学校 国際教育部

## 「海外研修引率経験から気づくこと」

校長 藤田 正紀

私が本校に教諭として赴任したのは平成5年4月のことでした。その年は創立100周年の年で、様々な記念行事が行われましたが、高校Ⅱ年生の文Bコースの海外研修がスタートした年でもありました。1クラス全員がアメリカ合衆国ワシントン州シアトル近郊で約1か月間のホームステイと英語学習プログラムを体験するという、当時としては画期的なものでした。7月中旬に出発し、8月中旬まで現地に滞在するという日程で、出発までの事前指導や帰国後の事後指導まで、すべてをクラス単位で行い、同じ経験を共有した仲間として高校Ⅱ年の1年間を過ごすというコンセプトは素晴らしいものだと感じていました。

同じ年度に、中学3年生が春休み中にオーストラリアのシドニー近郊で約2週間のホームステイをするという研修も始まりました。こちらにも希望者が多く、本校の生徒や保護者の方の関心の高さに驚かされました。



私自身も引率者として参加する機会を多く与えられました。最初の経験は、赴任2年目の、中3オーストラリア研修でした。シドニー近郊の街で、Brigidine Collegeという女子校の生徒や先生たちの家庭にホームステイするものでした。私はその学校の先生の家でホームステイしました。当時、「忍者タートルズ」という日本発のアニメが人気を博していて、その家の5歳の男の子とよく一緒にテレビを観ていたことを思い出します。自分が聞き取れる英語は子供番組だったという事実もなかなかのショックでした。

その2年後、高Ⅱの文Bコース担任と引率を任されました。訪れた地域は、シアトルからフェリーで1時間ほどの半島にある、BremertonやSilverdaleという地域でした。Bremertonには海軍基地があり、それに付随する産業が地域を支えている、という印象を受けました。また、近くのBainbridge Islandには、日系移民も多かったのですが、アメリカで日系移民が辿った歴史について学ぶきっかけにもなりました。日本にいて机上で学習する人種問題や社会問題と、現地を訪れて肌で感じる人種問題や社会問題がこれほどまでに違うものなのか、という思いを強く抱くようになりました。さらに3年後、同じく高ⅡのB類(旧文Bコース)の引率を務めました。研修地は、太平洋岸を北上し、カナダのアメリカ国境近くのAbbotsfordという地域になりました。この時味わったのは、桁違いのスケールの自然でした。また、多くの人種がうまく住み分けをしていて、カナダが「人種のモザイク」と言われる理由を実感しました。



その後、中2のニュージーランド研修、高Ⅰ高Ⅱのイギリス研修、キャリアデザイン in 台湾の引率も経験し、それぞれの研修で、異文化を肌で感じる事ができたことは、今の自分にとってかけがえのない体験になっています。1つの事がらを異なる角度から眺め、側面がいくつあるのか見当をつけてから自分なりに解釈するという今の私の考え方に多大な影響を及ぼしたことは間違いありません。

「国際化」や「国際教育」という言葉は何か特別な印象を与えることがありますが、要は、人種や民族にかかわらず、誰に対しても壁を作らず当たり前前に接することができることだと思います。逆説的に言えば、「国際化」をことさら意識しているうちは、それが自然の言動にはなっていないということです。本校は創立以来、国を越え時代を越えて他者のために奉仕する心を培ってきました。本当の意味での国際教育が根づいています。国外での研修に加えて、校内に留学生を迎えることも積極的に行っています。生徒の皆さんには、その環境を大いに利用して成長してくれることを期待しています。